道徳と欲求の関係性について

－ブラックバーンの準実在論を手がかりに－

河野迅汰（人間学コース）

（指導教員：堂囿俊彦）

キーワード：ブラックバーン、情緒主義、準実在論、フレーゲ＝ギーチ問題

はじめに

本論文では、誰もが関わらざるを得ない上に複雑な概念である道徳を、欲求という観点から今一度見直すことを目指す。そこでまず、道徳とはそもそも何なのかを考えるメタ倫理学のうち、英米圏の倫理学者が頻繁に取り上げる道徳の実在論と反実在論という対立軸に注目し、道徳と欲求の関連性を重要視する後者についてみていく。その後、反実在論を洗練させた現代倫理学者である S.ブラックバーンの理論について詳しく述べ、道徳を欲求と関連を認めた上で、道徳に客観性を担保することは可能かを考察していく。

第 1 章 メタ倫理学における三つの立場

1-1 道徳の 2 つの特徴とヒューム的な人間心理の理解

メタ倫理学の領域において基本的な問題に次のようなものがある。それは、道徳の特徴とヒュームに由来する標準的な人間心理の理解には、深刻な矛盾があるということである。

ヒュームは人間の心理状態について、客観性をもつ信念と規範性をもつ欲求に二分した。そして道徳の特徴には、客観性と規範性(実践性)の両方があるとされる。これらのことを考慮すると、道徳についての判断である道徳判断は、信念と欲求のどちらの表明とも断言できないということになり、道徳の矛盾が浮き彫りになる。この矛盾を上手く調和させることが、メタ倫理学における中心課題であるとされる。

1-2 道徳の存在論

道徳の実在論は、道徳的な事実がわれわれの心から独立して実在しているとした上で、道徳判断を道徳的な事実の認知に由来する信念の記述とする立場である。一方道徳の反実在論は、道徳を心と独立としたものとはせず、道徳判断を態度や欲求、感情を表出するものであるとする立場である。

現代の私達は、知覚を超越した善悪のようなものを実在とすることに対して違和感を覚える傾向がある。そうした意味では、現代の私達には反実在論の方がより親和的であるといえるであろう。そこで次章からは、特に反実在論の展開について見ていき、その問題点やそれに対する反実在論者の反論について紹介、検討していく。

第 2 章 反実在論の誕生と改良

2-1 エイヤーの表現型情緒主義

反実在論の代表的な学説に情緒主義や情動主義と呼ばれるものがある。情緒主義では、道徳判断を、話者の情緒を表現する発話として捉える。情緒主義の立場をはじめて鮮明に打ち出したのは、A.エイヤーである。

彼の情緒主義においては、「嘘をつくことは悪い」という道徳判断がなされた場合、「嘘をつくなんて！」とか「嘘をつくことはひどいなあ」というような意味だと解釈される。彼にとって善や正しいなどの道徳的な語は、信念の記述などではなく、「わあ！」といった感嘆符や声の調子と同じく話者の情緒の表出として捉えられる。したがって、感情の表出である道徳判断の真偽は経験的に検証できないとされる。

2-2 エイヤーの問題点

エイヤーの情緒主義に対しては、主に以下の 3 つの問題点が指摘されている。

第一に、道徳判断をめぐって対話が成立しなくなるのではないかというものである。第二に、道徳を本当に感情の問題としてしまってもよいのかという疑問である。そして最後に、表出主義(反実在論)全般に対して指摘された問題点として、「フレーゲ＝ギーチ問題」である。このフレーゲ＝ギーチ問題とは、以下のような問題である。条件文などの間接文脈の中に登場する道徳語には、話者の態度や欲求の表出と捉えることが困難なものがある。そうした道徳語が話者の表出でないとするならば、道徳を含む間接文脈を前提とする本来妥当なはずの推論に、誤謬が生じてしまう。情緒主義が、そのような推論の妥当性を説明できないならば、言語の意味論として致命的な欠点を抱えていることになる、というものである。

2-3 スティーヴンソンの説得型情緒主義

エイヤーの理論を修正し、情緒主義を発展させたのがC.L.スティーヴンソンである。彼は、エイヤーの情緒主義に改変を加えその洗練を試みた。

彼は、エイヤーが説明できなかった道徳における不一致について、「確信の不一致」と「態度の不一致」という概念を用いて分析し、その説明を試みた。また、道徳判断について彼は、エイヤーが考えたように道徳判断をただ欲求や感情を吐き出すためのものとはせず、不一致に対する解消の方法である「説得」という側面に注目した。道徳判断が、説得という

本要旨は、『2018 年度　静岡大学人文社会科学部社会学科　卒業論文要旨集』第 15 号に掲載されたものを、著者の許可を得て掲載するものである。許可なく転載することを禁止する。

より具体的なもので説明されるようになったことで、道徳判断が私達の生活で果たす役割が明確になった。

2-4 スティーヴンソンの問題点

スティーヴンソンの情緒主義には、不一致の説明の点で批判がなされている。態度が異なる場合に必ずしも意見に相違が発生するわけではないという意味で、単なる態度の不一致だけでは意見の不一致は生じない。こうした意味で、態度の不一致による意見の不一致の説明には限界があるとされる。

また、彼の情緒主義が個人間の道徳判断の一致に重きを置き、その一致を道徳の問題の最終的なゴールとして設定している点も、批判されている。道徳には客観的で確かな答えがあるという私たちの実感は、彼がいうような判断の一致を最終的な拠りどころとする観点からは、やはり説明できない。

最後に、スティーヴンソンの情緒主義は、「フレーゲ＝ギーチ問題」を全く解決できていない。彼の 1944 年の主著『倫理と言語』は、フレーゲ＝ギーチ問題が提起される以前に出版されたものであり、その対応策は何ら検討されていない。

情緒主義には批判も多いが、彼らの議論を踏まえて、その後も多く反実在論者が出現した。新しい反実在論者の中でも、挑戦的な理論を築き上げたのが、S.ブラックバーンである。

第 3 章 ブラックバーンの準実在論

3-1 投影主義

ブラックバーンは、自らの反実在論的な立場である「準実在論」を述べるにあたってまず、「投影主義」という考え方を導入する。この投影主義は、以下のように説明される。

われわれの感情や他の反応は事物の自然的特徴によって引き起こされるのだが、アイスクリームのおいしさ〔という特徴〕が、それがわれわれに与える快に対応しているというのと同じ具合に、あたかもこうした感情に対応する特徴が世界の側に存するかのように表現することにより、われわれは世界に「金メッキあるいは色を塗る(gild and stain)」のである。

この投影主義を採用した場合、道徳的性質なるものは実在せず、私たちの何らかの欲求や態度などといった主体的反応の投影によって、それが世界に存在するかのようにみなされているということになる。

ここで注意すべきなのは、彼は道徳的性質を、色や味など感覚で捉えられる主体的性質である「二次性質」と完全に類比的に捉えているわけではないということである。このことは、J.マクダウェルに対する彼の批判から明らかになる。

3-2 準実在論

準実在論とは、一見すると実在論的に見える通常の道徳的思考を、反実在論の立場でどこまで説明し、正当化することができるかを示す試みのことである。ブラックバーンは準実在論を通して、投影主義という反実在論にコミットした立場を採用した上で、私たちの日常でみられる、道徳の客観性といった実在論的な側面を上手く説明することに挑戦する。

3-2-1 道徳の客観性の説明可能性

ブラックバーンは、道徳的性質の客観性を説明するために、道徳的感受性という概念を導入する。彼によれば、道徳的感受性とは入力としての情報を使って出力としての反応を決定する複雑な回路のことである。投影主義においては、道徳判断で述べられる道徳的性質は私たちの反応の投影である。それゆえ、実在論のように、投影された性質が対象に備わっているかどうかという意味で道徳判断の真偽を問うことはできない。そこで彼は、投影の適切さを投影の源泉である道徳的感受性の観点から判定することができるとしたのである。彼によれば、道徳判断が真であるのは、私たちの道徳的感受性が歪められていないときに限られる。

3-2-2 道徳的議論の不確定性

道徳的感受性による道徳判断の真偽の判定では、道徳の答えは確定しないという、不確定性が見て取れるように思える。この不確定性という問題について、ブラックバーンは木の幹と枝という比喩を用いて応答を試みる。

3-3 フレーゲ＝ギーチ問題への応答

ブラックバーンは、フレーゲ＝ギーチ問題で問題視される条件文などの間接文について、「伴う」という関係の考察を経て、1983 年の論文で「高階の態度」という概念を用いた説明を試みた。この高階の態度とは、ある対象への態度への態度である。

高階の態度の考え方を取り入れると、間接文も表出文とすることができ、前提から結論までの妥当性を確保しフレーゲ＝ギーチ問題を克服できるとした。

おわりに

反実在論は、ブラックバーンの準実在論という一つの完成形をみた。彼は、反実在論の弱点に一定の解決策を示した。彼の理論は、反実在論に、さらなる理論的な基礎づけを与えるものであると言えるだろう。

しかし、だからといって、彼の理論が反実在論として完璧なものであることにはならない。準実在論は、反実在論に立ちつつも実在論的な道徳の特徴を取り込むことにその焦点が当てられていた。だが、反実在論を補強するために実在論的な道徳の在り方を認めることに注力することで、準実在論は、反実在論が有していたラディカルさを失ってしまった。

また、彼の準実在論自体への批判も少なくはない。これらの批判について、ブラックバーンは年を経る中で自らの理論に修正を加えつつ反論を展開している。こうした新しい反論について、さらなる研究を進めることが今後の課題となる。

主要参考文献

- A.J.エイヤー 〔吉田夏彦訳〕 『言語・真理・論理』 岩波書店、1955 年
- C.L.スティーヴンソン 〔島田四郎訳〕『倫理と言語』 内田老鶴圃、1984 年
- S.ブラックバーン 〔大庭健編・監訳〕 『倫理的反実在論 ブラックバーン倫理学論文集』勁草書房、2017 年

本要旨は、『2018 年度　静岡大学人文社会科学部社会学科　卒業論文要旨集』第 15 号に掲載されたものを、著者の許可を得て掲載するものである。許可なく転載することを禁止する。